

教育改善・学生支援活動に参画する学生の教育的効果

吉田 博

(徳島大学大学開放実践センター)

1. はじめに

近年の大学教育における教育改善、学生支援の特徴の1つとして、学生の参画が挙げられる。全国的にも、学生がFD活動に参画し、学生視点から教育改善に携わる事例が増加している¹⁾。また、ピア・サポート等、学生同士で支援する制度の、全国の大学における実施率は35.6%であり、年々増加している²⁾。さらに、ピア・サポート未実施校の46.9%が実施を検討している²⁾。徳島大学においても、2011年9月に大学教育委員会が定めた「徳島大学FDの定義³⁾」の中で、FDに学生の参画を得ることが明記されている。また、学務部学生生活支援課が主催する「学生支援担当教職員研究会」では、2011年度、2012年度共に学生による学生支援(ピア・サポート)をテーマとして取り上げている。このように、本学においても注目を集めていることがわかる。学生が教育改善、学生支援に関わることの効果として、より学生のニーズに合わせた活動ができる、教職員と学生との協働が実現することが考えられるが、特に活動を行う学生の教育的効果が大きいことが先行研究などで明らかにされている⁴⁻⁵⁾。徳島大学では、学生チーム「繋ぎ create (以下、繋ぎ)」が学内の教育改善、学生支援に貢献することを活動の柱の1つに掲げている。繋ぎは2010年11月にチームが発足して以降、学内のFD活動、学生支援活動に参画し、学生や教職員を対象に、大学生の躍進を目的とした企画を開催してきた⁶⁾。これらの活動が教育的に意義あるものとして、今後も継続していくためには、繋ぎのメンバーが活動を通して得たものや、自身の学生生活に与える影響を明らかにすることが重要であると考えられる。

本研究は、学内の教育改善・学生支援活動に参画する学生が、活動を通して得ることができた教育的効果と学生生活への影響を、質問紙調査をも

とに分析し、明らかにするものである。本発表では、調査から明らかになった、繋ぎメンバーが活動を通して得た知識やスキル、繋ぎメンバー自身の学生生活に与えた変化を報告する。

2. 調査の概要

2012年10月9日現在、繋ぎに在籍していた学生13名を対象とした。調査方法は2段階による無記名の質問紙調査である。第1段階の質問紙の内容は、①活動歴、②活動を始めたきっかけ、③活動を通して身についたこと、得たこと、④活動動機、⑤活動が学生生活に与えた変化であり、①は年月数を問い、②、③、④は記述式、⑤は選択式であった。第2段階の質問紙の内容は、①活動歴(第1段階と同様)と、⑥第1段階の③において記述された内容から項目を抽出し、それぞれの項目について、複数選択式で回答を求めたものである。これは、身についたこと、得たことを漏れなく調査するためである。本報告では主に①、⑤、⑥のデータを用いて分析を行う。

3. 結果と考察

(1) 活動を通して得たこと、身についたこと

第1段階の質問紙の設定「繋ぎ create の活動を通して学んだこと、身についたこと、得たことをすべてお書きください。(記述式)」のすべての記述から36項目を抽出した。第2段階調査において、これら36項目の中から、繋ぎの活動を通して学んだこと、身についたこと、得たことを選択式で問うた(複数選択可能)。表1は、抽出された36項目とその選択率を選択率の多い順に表示している。ここで、活動歴が1年以上のメンバー7名をA群、1年未満のメンバー6名をB群とする。A群の選択率の平均は72.6%、B群の選択率の平均は33.8%であった。まず、挙げられた

項目全体を見ると、コミュニケーション力、社会人としてのマナー、対人スキルに関する項目が多い。次に、A群の学生のみが選択した項目は「自分の意見を相手に伝える力」、「コーディネート力」、「相手の意見を引き出す力」、「学業の大切さ」であった。このことから、早い段階でマナーや対人スキルを身に付け、活動歴が長くなるにつれて、発信力やワークショップにおけるファシリテーション力などのスキルを身に付けていることがわかる。群別のデータは発表の際に報告する。

表1 抽出された項目の選択率 (%)

学んだこと、身についたこと、得たこと	選択率
1. 名刺交換の仕方	100.0
2. 議事録・企画書などの書き方	92.3
3. 人との出会いの大切さ	92.3
4. 人の話を傾聴する力	76.9
5. 人脈	76.9
6. 大人数の人前で話す力	69.2
7. 自身の考えを相手に伝える力	69.2
8. 企画・イベントの運営の仕方	69.2
9. 課外活動における学びの意味	69.2
10. 真剣な話ができる仲間	69.2
11. ビジネスマールの作り方	61.5
12. 目上の人・立場の異なる人と話す力	61.5
13. 会議やミーティングの進め方	61.5
14. 会議やワークショップの司会の仕方、スキル	53.8
15. コーディネート力	53.8
16. 議論・討論の仕方	53.8
17. 会議やミーティングを行うための準備の仕方	53.8
18. 立食パーティー・飲み会のマナー	53.8
19. 学生生活の充実	53.8
20. 大学教職員との関わり方	53.8
21. 自分の意見を相手に伝える力	46.2
22. ワorkshopなどの手法、ノウハウ	46.2
23. 会議やミーティングなどで自分の意見を言う力	46.2
24. 目上の人・立場の異なる人との接し方	46.2
25. 挑戦することの大切さ	46.2
26. 自分自身について（自己理解）	46.2
27. 資料の作り方	38.5
28. 企画力	38.5
29. 相手の立場に立って考える力・話す力	38.5
30. チームワーク	38.5
31. 相手の立場に立って物事を考える力	38.5
32. 度胸	38.5
33. 自信、自負	38.5
34. 学業の大切さ	30.8
35. 相手の意見を引き出す力	23.1
36. 責任感	23.1

表2 繋ぎ create の活動が与えた変化 (N=13)

変化の項目	回答数
I. 自身の学業への取り組み方	8
II. 学生生活の有意義観	12
III. 将来の進路に対する考え方	1

(2) 学生生活に与えた変化

第1段階の質問紙において、I. 自身の学業(授業、専門科目の学習)への取り組み方、II. 学生生活の有意義観、III. 将来の進路に対する考え方、のそれぞれに対し、繋ぎの活動が与えた変化を選択式で問うた。表2は、繋ぎの活動がそれぞれの項目に対し、ポジティブな変化をもたらしたと回答した数を表している。結果より、繋ぎの活動は学生生活の有意義観を高めることに繋がっていると見える。また、学業への取り組み方についても、良い影響を与えていると考えられるが、特に、活動歴が長いほど影響が大きかった。詳細なデータやその他の分析は、発表の際に報告する。

4. まとめ

繋ぎのメンバーは、活動を通して、対人スキルなどの社会生活で必要となるスキルを獲得しており、自身の学生生活を有意義に過ごしていることがわかる。また、活動歴が長くなるにつれて、発信力やチームで活動するために必要なスキルを身に付けている。さらに、自身の学業への取り組み方についても良い変化をもたらしていると推察できる。以上のことから、繋ぎの活動は、活動を行う学生のスキル向上だけでなく、学業面においても意義がみられる。ただし、これらの教育的効果をさらに高めるためには、活動の体系化や継続的な研究が必要である。

参考文献・資料

- 1) 木野 茂：大学を変える学生が変える，ナカニシヤ出版，2012.
- 2) 日本学生支援機構：大学、短期大学、高等専門学校における学生支援取り組み状況に関する調査（平成22年），2011.
- 3) 徳島大学FDの定義：徳島大学大学教育委員会 <http://www.cue.tokushima-u.ac.jp/fd/article/0000657.html>（2012.11.9）.
- 4) 佐藤浩章：学生支援策としてのピア・エデュケーションの可能性，現代の高等教育，473，27-31，2005.
- 5) 西本佳代：誰がピア・サポートをするのか，大学教育学会誌，33，1，130-136，2011.
- 6) 繋ぎ create：平成22、23年度繋ぎ create 活動報告書，2012.